

## 【実践報告1】東浦町立生路小学校

### 1 はじめに

本校は、知多半島の北東部に位置する学校である。開校は1877年で、平安時代の書物「延喜式（えんぎしき）」には、生路（生道）の製塩についての記述が残っているほど歴史が深く、自然に囲まれた学区である。児童は地域の方々に見守られながら、のびのびと学校生活を送っている。令和4年度は、各学年2学級、特別支援学級3学級の15学級で、児童数は320名である。

### 2 実践

#### (1) グランドデザインの策定・周知と教育目標

教育目標の共有を図るグランドデザインの策定に向けて、先行研究の各種シートや、アンケートを活用して取り組んだ。現状把握シート（資料1）から、児童の強みとしては、思いやりがある、素直で優しい、決められたことはしっかり行うことができることなどが挙げられた。弱みとしては、消極的で発表が苦手、自ら考えて行動することが苦手、持続が難しいことなどが挙げられた。

そこで、児童に身に付けさせたい資質・能力を、「目的意識をもち、なりたい自分に向かって、自ら行動する力」「人の考えを聞き、意見を言ったり、自分の考えを再構築したりする力」「状況に応じて、新たなことを発案する力」の三つを設定した。

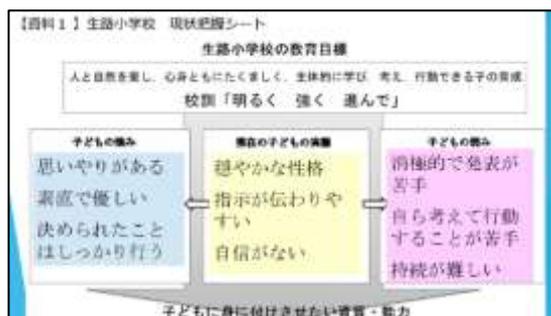
次に行ったSWOT分析シート（資料2）からは、素直で真面目な児童が多く、地域・保護者との信頼関係があり、児童の居場所がある反面、幼くて消極的であることや、地域との意識のずれや行事への思いが希薄になることなどが見えてきた。さらに、教職員の意識を調べるために、カリキュラム・マネジメント検討用シートでの分析を行った。その結果、どの項目にも、おおむね半数の教員ができていると回答した。また、「教職員同士の連携が十分にとれている」「児童に身に付けさせたい力や、目指す児童像が比較的明確である」「授業実践での効果を重視している」

「地域との連携の実践を意識して取り入れることで、学校目標や重点目標に反映しようとしている」の四つの項目の評価が高かったことが分かった。数値として顕著には出てこなかったが、地域との連携の実践を取り入れることで、本校の学校目標や、重点目標に反映しようとしている点は、意識する項目として位置付けた。

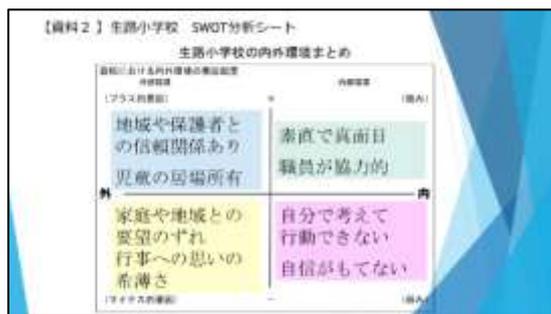
以上の結果を受けて、本校のグランドデザインを策定した（資料3）。

左側部分は、保護者や地域の方々へ配付したもので、右側部分は、児童用に配付したものである。

【資料1 現状把握シート】



【資料2 SWOT分析シート】



【資料3 グランドデザイン】



以下は、児童用ランドデザインについての説明である。

ランドデザイン

上部：校訓「明るく 強く 進んで」

周囲：児童会スローガン（児童の願い）

：学校重点目標（学校の願い）

：みなさんの願い・支え（保護者・地域の願い）

：生路っ子の学び（現職教育の方向性）

：力をつけたいこと（教師の願い）

中央にいるキャラクター：いくじら

キャラクターデザイン：児童発案

児童がどのように生活をおくれば、校訓に近づくことができるか、一目で分かるように配置している



児童会スローガンについては、6年生が、本校の校訓を基にして、案を考え出した。案が出た後に学級で話し合いを行い、各学級から数点の候補を選んだ。その後、代表委員会の話し合いを通して決定した。決まった児童会スローガンは「ENJOY」である。ENJOYのアルファベットそれぞれに意味があり、浸透しやすいスローガンとなった。

【資料4 児童会スローガン】

ランドデザインを策定した後は、全教室にプリントを掲示した。また、学校通信や朝会を利用して周知を図った。学校の昇降口にも、拡大した児童会スローガンを設置した（資料4）。



ランドデザインの周知をする活動を図る中で、児童に変容が見られた。特に、6年生に変容が見られた。校訓を基にしたスローガンを考えたことで、本校の教育目標や、校訓の意味やねらいについて知るよい機会となった。その結果、担任へ教育目標についての質問をしたり、本校の歴史について調べたりする児童が現れた。

児童自らスローガンを考えたことで、自分たちの目標としての意識を高めることができた。

(2) 目標に基づくカリキュラム・マネジメント

ア これまでの実践の活用

まず、これまでにおける本校の研究のレガシーを使った。コロナ禍によって、さまざまな行事や活動が中止・縮小される中でも、ユニバーサルデザインや背面黑板（資料5）の工夫により、教師が児童に語りかけ、児童とのつながりを密にしていくことに全学級で取り組んだ。児童が授業に関する学習スタンダードを守ることに、担任の思いが詰まった掲示を意識的に見ること、整えられた教室環境等から、三つの資質・能力を身に付けられるようにしたいという願いを込めた。

【資料5 背面黑板の工夫】



## イ 学習指導案の工夫

学習指導案に指導の力点として、「単元を通して身に付けさせたい資質・能力」を明記し、教師が身に付けさせたい資質・能力を、より意識しながら授業を組み立てていくこととした。3年総合的な学習の時間「すてきな場所を教えます」の授業で担任は、地域の伝統文化を守るために自分たちができることは何かを考える力であると考えた。その部分を育成するための手だてとして、地域の歴史や伝統文化を知り、出てきた課題に対して自分にできることがないかを考えるための話し合いの時間を設けるようにした(資料6)。

学習指導案に落とし込むことによって、考えをまとめる時間や、話し合い活動を、意図的・計画的に行うことで、自分の考えを再構築する取組を行うことができた。

### (3) 地域と目標を共有し、連携・協働した実践

#### ア 3年生の実践

東浦ふるさとガイドの方と連携して、地域学習を行った。地域の歴史的建造物を一緒に回りながら、地域の方の思いや願いを知るとともに、今後はこのような施設の維持・管理そして、発展をさせていくために、どうしていくとよいのかについて考えた(資料7)。

本実践は、社会科と総合的な学習の時間を横断したカリキュラムを作成して実践した。二つの教科を横断的に取り扱うことで、通常よりも多く調べたりまとめたりする時間を確保することができたので、児童は、テーマについてよりいっそう考えを深めることができた。実践の前には、担当教師がどのように授業を進めていくのかについて、ふるさとガイドの方と数回にわたり折衝を行った。以前は、ガイドの方に任せる部分が大きかったが、地域学習を学ぶことの意義やねらいを共有することによって、ねらいに沿った授業を展開することができた(資料8・9)。

その他にも、10月に行ったぶどう園の見学では、東浦特産のぶどうづくりの工夫や努力を直接農家の方から聞き、地域の特産物を知ろうとする意識をいっそう高めることができた。

さまざまな体験活動をする中で、児童は自分なりの課題を見だし、その解決に向けて主体的に取り組む姿が見られた。

#### イ 4年生の実践

4年生は「この木何の木気になる実」というテーマで、地元の造園業者の支援の下で、校地にある果樹園の世話をしたり、収穫したりする学習を行った。果樹園にはサクランボ、梅、びわ、すもも、ブルーベリー、栗など、1年間を通して果実を収穫できる樹木がたくさん植えられている(資料10)。

講師は、何度も学校に足を運び、樹木についてさまざまなことを丁寧に教えてくださった。児童は樹木の水やりをしたり、伸びた雑草を抜いたりしながら1年間世話をしている。講師の助言もあり、次第に愛着を

【資料6 3年学習指導案】



【資料7 地域学習の様子】



【資料8 授業の様子】



【資料9 児童ワークシート】



【資料10 樹木の世話】



愛着をもって、主体的に樹木の世話をする姿が見られるようになった。

そして、実った果実を収穫しては、果実を味わうための方法を調べ、話し合いをして、調理の方法を決めた（資料11）。世話や調理方法を考える中で、果樹園や果実の状況に応じて、新たなことを発案することができるようになっていった。

【資料11 果実の調理】



### 3 実践の成果と課題

#### (1) 成果

各種検討シートやアンケートの結果を活用することで、学校の課題が明確になり、職員間で意識を共有し、連携を深めることができた。また、学級掲示や指導案などで、身に付けさせたい資質・能力に対しての意識をより高めることができた。

本研究を通して、地域とのつながりを強化することができた。これまでは毎年のこととして、講師主導の下で授業を行っていた実態があった。しかし、本実践によって、どのようなねらいや目標があるのかについて講師にも理解してもらい、共通の目標をもって教育活動に当たることができたと考える。その結果、児童は受け身にならず、主体的に学ぶ場面が多く見られた（資料12・13）。

【資料12 地域学習の様子】



#### (2) 課題

今後も継続していくためには、ランドデザインを早期に作成し、教育課程全体で組織的に児童を育てることを計画していく必要がある。学校目標と身に付けさせたい資質・能力とを関連付けた、更なる授業改善が必要である。

そのためには、長い時間をかけて計画を立てていかなければならない。また、取組によっては年々変わるものもあるので、計画を立てても変更を余儀なくされる場合が考えられる。担当学年の変更や職員の異動のことも考えると、教師がどのように対応するかが最も大きな課題だと言える。

### 4 おわりに

「社会に開かれた教育課程」を意識した教育活動に取り組むことで、学校の教育目標を、以前よりも地域の方と共有することができてきた。その中で児童の主体性が育ち、意欲的に学ぶことができた点は、一つの成果であったと言える。しかしながら、継続的に取り組んでいくことの難しさも課題として残った。

今回の研究を通して、地域とのつながりはいっそう深まったと考える。また、講師をしていただける地域の方がたくさんいることも分かった。今後は、コミュニティ・スクールの学校運営協議委員とも一緒になって、地域と学校をつないでいきたいと考える。そして、本校の教育目標を学校・家庭・地域の三者で実現できるように努めていきたい。

【資料13 梅ジュース作り】

